

## 秋瑾「滬上有感」試釈

横 山 弘

本誌前号の巻頭をかざった秋瑾遺墨「滬上有感」詩稿景照一張は、清末旧詩の一遺珠として、また革命文物の新出資料として、まことに貴重なものであった。遒勁な筆跡をながめていると、秋瑾の肉声に接するようにさえ感じられる。この資料の原委については、すでに麗沢生氏の解説に備わるし、われわれとしては秋瑾の親筆をただ余念なくながめればよいのであるが、この詩の注釈のようなものを提出せよとの樽本主編の厳命である。一号おくれたの掲載はすでにして過時、浅学の野暮な蛇足が革命先烈の風雅をそこなうことを恐れるが、厳命もだしがたく求めに応ずることにする。(1981.9.20, 筆者)

## 滬 上 有 感

微雨生新涼 仲夏如深秋 鳴蜩歛夕音 燿燿迎風流 羣居情不孤 心迴境自幽  
 宵空起清吹 離思方悠悠 豈伊川塗斲 念此躔運遒 頻年嬰憂瘵 憔悴忝嘉猷  
 翩然冀遐征 投袂涉長流 真契始爾萌 外物迫相尤 洪川無蘋藻 何以別沈浮  
 高岑尽馨芬 何以別薰蕕 微生信有区 人理諒難侔 既警素絲泣 鮮復岐路憂  
 吾生自有涯 慷慨惜年徂 慕茲狙公術 慨彼漆室嘆 先民有遺規 道在復何求

詩題「滬<sup>こじょう</sup>上<sup>こ</sup>感有り」。滬とは、もと江蘇省上海県の北東を流れる川の名、転じて上海の意。秋瑾の最初の東渡は、甲辰、1904年、明治37年の夏であり(徐自華「鑑湖女俠秋君墓表」)、この詩稿は、出国以前の上海での旧作を、明治38年、1905年初秋の東京の實踐女学校分教場の舎監室で秋瑾がみずからしたため

たものである。

「微雨 新涼を生じ、仲夏も深秋の如し」時は仲夏、まだ夏の始りというのに、折からの微雨にあたりは涼しさにつつまれ、あたかも深い秋のような気配である。いったいに、秋瑾の詩集にあらわれる季節は、秋が多きを占めるが、鋭敏な作者の感覚は、秋のただ中であって秋をうたうことより、むしろ、夏の盛りにあって、いちはやく秋を感じることにあつたようである。「劇しく憐れむ北地の秋風の早く、<sup>すで</sup>已に覚ゆ涼しさの翠袖の<sup>うすぎぬ</sup>羅を侵すを」(「秋日独座」)、また、「知らず炎暑の何れの時に去れるを、涼しさの羅衣に到りて早き秋を覚ゆ」(「独座」)。秋瑾の感性は、したがって、春を詠んでも、春のよろこびよりは、むしろ、逝く春、春寒などを好んでとらえる。

「鳴蜩<sup>せみ</sup>夕音を<sup>せみ</sup>飲め、<sup>ゆうりゅう</sup>熠燿風流を<sup>むか</sup>迎う」さきほどまで、ひとしきり鳴いていた<sup>ひぐら</sup>しもその夕べの鳴き声を<sup>しだい</sup>に<sup>おさめ</sup>ゆき、夕やみの中にホタルがあらわれて、風流の人を迎える。「鳴蜩」は「毛詩」の<sup>ひんぶつ</sup>豳風「七月」に「四月には<sup>のみ</sup>秀る<sup>よう</sup>萋あり、五月には<sup>せみ</sup>鳴く<sup>あ</sup>蜩あり」と見え、陰曆5月の風物。「熠燿」の二字も同じ豳風の「東山」に、「熠燿は<sup>い</sup>宵に行く」と見え、毛伝に「<sup>ほ</sup>燐也」、さらに「<sup>ほ</sup>燐は<sup>あ</sup>螢火也」とある。この毛伝のいう意味を、鬼火と解する説とホタルと解する説があり、さらには朱子のごとく、「熠燿」を名詞ではなく形容詞、「光りの定まらざる貌」とみる説もあるが、ここは、唐人の詩におけるごとく、ホタルの意に使われている。

「羣居して、情、孤ならず、心、<sup>はる</sup>迴かなれば<sup>おの</sup>境自ずから幽なり」ころざしを同じくする仲間たちと共にあるからして、私の心情はもはや孤立したものではない。心は<sup>はる</sup>けきかなたを<sup>め</sup>ぎすが<sup>ゆえ</sup>に、現在ただいまの私の境地は、おのずから、むしろ幽寂ですらある。「羣居」とは、「論語」「衛靈公」篇に「羣居数日、<sup>げん</sup>言は<sup>ぎ</sup>義に及ばず」、「礼記」「曲礼上」に「羣居五人なれば、則ち長者必ず<sup>こと</sup>席を異にす」など見え、仲間と共にあること。その反対の情況が、「礼記」にいわれる「<sup>り</sup>離羣索居」である。作者は、すでに、1905年8月、東京で成立した同盟会に、その成立の半月あとには入会し、しかも「浙江省の責任者となり、浙江人の同志を多数、同盟会に吸収」(武田「秋風秋雨人を愁殺す」103—4頁)していたばかりでなく、このたびの一時帰国の間に、正確にいえば乙

已六月の間、紹興へおもむいて、その地の熱誠小学校に徐錫麟<sup>まみ</sup>に見えて、徐の紹介で「光復会」に入会している（陶成章「秋瑾伝」）。詩の「羣居」の二字は、そうした作者の新しい環境を総括する。また、「心迥」の二字は、いまや明確な革命者としての眼界のひらけた秋瑾の胸中を総括しよう。

「宵空<sup>しょうくう</sup> 清吹<sup>せいすい</sup>起こり、離思<sup>りし</sup> 方<sup>まさ</sup>に悠悠<sup>ゆうゆう</sup>」ふと耳をすますと、誰が吹くのか、夜空に流れる澄んだ笛の音。別離の情は、かぎりなくわきおこる。「清吹」の「吹」は、吹奏楽器、笛の類をいう。陶淵明の「諸人共游周家墓柏下」詩に、「今日 天氣 佳し、清吹と鳴蟬と」と見える。「離思」は、わかれの思い。ふたたび日本へ旅立つ秋瑾の胸中に去来する感情をいう。曹植の「雜詩」に「離思<sup>まこと</sup> 故<sup>た</sup>に任せ難し」また晋の潘岳の「金谷集作詩」詩に、「何を以てか離思を叙べん、手を携えて郊畿に遊ぶ」。

「豈<sup>あに</sup> 伊れ川塗<sup>こ</sup>の躑<sup>はる</sup>かなるのみならんや、此の躑運<sup>つ</sup>の適<sup>おも</sup>きんことを念う」いま心に迫るのは、はるかに山川を隔てる思いだけではない。あれを思いこれを考えると、私の運もはやつきてしまったのかと思えるほどだ。前の句は、宋の謝靈運の「九月從宋公戲馬台集送孔令詩」に「豈<sup>あに</sup> 伊れ川途<sup>こ</sup>の念<sup>おも</sup>のみならんや、宿心<sup>まさ</sup> 將<sup>は</sup>に別れんとするに愧<sup>は</sup>づ」とあるのをふまえる。後の句、明確な先行の表現を思いあたらぬ。「躑」は、めぐる、意。

「頻年<sup>ひんねん</sup> 憂<sup>ゆう</sup>瘵<sup>さい</sup>に嬰<sup>かか</sup>り、憔悴<sup>かゆう</sup>せしに嘉猷<sup>かたじけな</sup>を忝<sup>かたじけな</sup>くす」この数年、憂いの病いにかかり、心身ともすっかり憔悴していたところへ、現状を打開すべき「嘉猷」、よい方策を先覚からささげられた。「憂瘵」は、憂病というに同じ。「瘵」の字、「毛詩」にも使われているが、「毛伝」に、「瘵は病也」とある。秋瑾がこのころ、実際に健康にめぐまれなかったことは、陶成章の「秋瑾伝」にも、「已に復た東渡するも、疾<sup>かか</sup>に罹ること数月、愈えてのち、青山実践女学校に入る」とあることから想像される。「憔悴」の語、早く「楚辞」の「漁父」に、屈原を形容して「顔色憔悴」と使われてよく知られる。「嘉猷」は、「尚書」の「君陳」に、「爾<sup>なんじ</sup> 嘉謀<sup>かぼう</sup>嘉猷<sup>かゆう</sup>有らば、則ち入りて爾<sup>なんじ</sup>の后<sup>きみ</sup>の内に告げ、爾<sup>なんじ</sup> 乃ち之れを外<sup>おこ</sup>に順<sup>こ</sup>ない、斯<sup>こ</sup>の謀<sup>か</sup>斯<sup>か</sup>の猷<sup>か</sup>は惟れ我が后<sup>きみ</sup>の徳なりと曰え」と見える（「礼記」の「坊記」篇にも同じ表現がある）。よい方法、と訳し得る。作者に即していえば、日語講習会を終えて一時帰国のこの期間に、徐錫麟を介して「光復会」

に入会して、行動の指針をあたえられたことを意味しよう。

「翩然として退征を冀い、袂を投って長流を渉らんとす」かくて、いまやきっぱりと、「憔悴」から脱して、「退征」、遠征、をのぞんで、袂を振って長き流れを渉ろうとする。「翩然」は、身をひるがえして、新しい行動にたちあがるさま。「退征」は、三国魏・繁欽の「与魏文帝牋」（「文選」巻40）に、「北狄の退征を詠じ、胡馬の長思を奏す」と見え、さしあたっては、再び東渡することを指していようが、もとより、さらにそのかなたに広がる民族解放の革命へのはるけき道程そのものをイメージしよう。「投袂」とは、たもとを振り払うこと。勢よく行動に立ちあがるさまをいう。「左伝」宣公十四年に、「楚子、之れを聞き、袂を投じて起つ」と見え、その杜注に、「投とは振也。袂とは袖也」。「長流」、先行の使用例としては、曹植の「贈王粲」詩（「文選」巻24）に、「樹木は春の華を発き、清らかなる池は長き流れを激しくす」。

「真契 始めて萌すも、外物 迫りて相い尤む」この二句、難解。ようやくにして真実の人間関係が発展しはじめようとするとき、いっぽうでは、自己の外にあるくさぐさの事物がおしよせてきてあたをなす、と訳しておく。「真契」は、唐の陶翰の「望太華贈盧司倉」詩に「良友 真契を垂る」、蘇東坡の「和陶桃花源」詩（「合註」巻43）に、「却って笑う、秦を逃れし人の真契に非ざるを畏るる有るを」などとある。「外物」は、「莊子」雜篇に「外物は必ずべからず」とあるそれ、己れの外にある物、「人間の欲望の対象となる外界の事物事象の一切」（「朝日中国古典選」福永光司「莊子・外物篇」解説）をさす。

「洪川 蘋藻無し、何を以てか沈浮を別たん」滔滔たる大河には、うきくさや藻のような小さな流れに繁茂するそこはかかない植物は、もはや存在せぬ。大河では浮沈を区別するすべはない。「蘋藻」は、「毛詩」召南「采蘋」に、「于いて以て蘋を采るは、南の澗の浜、于いて以て藻を采るは、彼の行潦に于いてす」とあるのをふまえる。

「高岑 尽く馨芬、何を以てか薰猶を別たん」小高い山にはどこも香草ばかり、平地のように、香草と悪草を区別するすべはない。「高岑」の話、曹植の「七啓」（「文選」巻34）に「其の居や、激水を左にし、高岑を右にす」と見え、李善の注に「爾雅」積山を引いて「山の小にして高きを岑と曰う」とある。

「薰」は、かおりのよい草、「蕕」は、くさいにおいを発する草、善と悪にとたとえる。「左伝」僖公四年に、「一薰一蕕、十年にして尚猶臭み有り、と」と見え、その杜注に「薰は香草、蕕は臭草、十年臭きこと有りとは、言うところは、善は消え易く、悪は除き難し」。以上の四句、「洪川」「高岑」は、これからたちまじわるべき大きな世界、そこで接するはずの大きなスケールの人物たちを象徴するものと思われる。それらを前にして、作者の胸中は、期待と不安にふるえる。

「微生まこと 信くに区有り、人理まこと 諒ひとに侔ひとしかり難し」人の世の微小なる生活のありようは、まことにさまざまであり、人間世界のことわりは、本当にひとしなみにはいかぬことが多い。「微生」は、あるかなきかの生活、杜甫の「奉贈鮮于京兆二十韻」詩に、「微生 忌刻びせいに霑きこくい、万事うろお益ますます酸辛なり。「人理」は人間に関する原理、「漢書」の「叙伝」に、「人理を窮め、万方を該す」、左思の「蜀都賦」に、「一には神怪けいを經し、一には人理いを緯す」。

「既に素絲おどりに警おどろきて泣き、岐路きじくに復すくすること鮮すくなくして憂う」わたしは、これまでも何回となく、白いねりいとを前にして悲しんだ墨子のごとく、人生の選択にまよって泣き、いったん選択した行動は、やりなおしがきかぬことを、岐路を前にして泣いた楊朱のごとく、悲しんだものだ。墨子と練絲、楊朱と岐路の故事は、「淮南子」「説林訓」などに見える。晋の阮籍の「詠懷詩」の一首は、「楊朱 岐路に泣き、墨子 染絲を悲しむ」の二句で起こる。

「吾が生おのづか 自かぎら涯かぎり有り、慷慨かきして年としの徂ゆくを惜おぼしむ」人生は、有限である。「自ら」の一字には、どうころんでも、けっきょくは、という感慨がこもる。この事実を直視するとき、荏苒よわいとしてわが年としが逝ゆくのを惜しんで、心がたかぶる。前の句は、「莊子」「養生主」篇に、「吾が生かぎは涯かぎり有り、而も知かぎは涯かぎり無し」とあるのをそのまま使った。「慷慨」は、心たかぶること。「古詩十九首」第五首に、「一たび弾きて再三歎し、慷慨して余哀あり」。その李善の注が「説文」(「忼慨」の条の説解)を引いて「慷慨とは、壯士の心に志を得ざる也」。『慷慨』は「忼慨」に同じ。「徂」は、時間が過ぎゆく意。漢の韋賢の「諷諫」詩(「文選」巻19)に、「歲月 其れ徂く、年よわいは其れ考おひに速おほばん」、その李善の注に、「徂は往く也」。

「<sup>こ</sup>玆の<sup>そごう</sup>狙公の術を慕い、<sup>か</sup>彼の<sup>しつしつ</sup>漆室の<sup>なげ</sup>嘆きを<sup>なげ</sup>慨く」「狙公」さるつかい、というのは、「莊子」の「斉物論」篇に見える猿まわしの親方。この親方、多くの猿を飼っていたが、猿どもにトチの実をわけあたえてやりながらいった。「朝には三つづつ、夕方には、四つづつやろう」。猿どもは、一斉にイキリ立った。そこで、親方、「それでは、朝には四つにして、<sup>くれ</sup>暮には三つにしよう」と表現をかえると、猿ども納得してよろこんだ、という。「莊子」は、この話につづけて、「名の実は未だ<sup>そこな</sup>虧われざるに、喜怒は用を為せしなり」。朝三暮四も朝四暮三も、表現をかえてみただけで、實質には何の変化もないのだが、(猿どもは)あるいは喜び、あるいは怒り、反応はことなる。「亦た<sup>ぜ</sup>是に<sup>した</sup>因わんのみ」福永光司によれば、「是」とは、「是非の相対を超えた絶対の是、すなわち万物斉同の实在の真相」、それを悟れば、「静かなる正気にその精神を安らげることがができる」(前掲書)。「是を以て聖人は、之れを<sup>ととの</sup>和うるに是非を以てして、<sup>てんきん</sup>天鈞に休む。是れ之れを兩行と謂う」、同じく福永のパラフレーズを引けば、「だから聖人すなわち絶対者は、是非の価値的偏見を<sup>ぜ</sup>是もなく<sup>ひ</sup>非もない实在の一に調和し、心知の分別を放下して『天鈞』すなわち絶対的一の世界に安住する。ここでは、一切万物の矛盾と<sup>すがた</sup>対立の相は、矛盾と対立のまま、『<sup>ふた</sup>兩つながら<sup>おこ</sup>行なわれてゆく』——同時に存在し得るから、この境地をまた「兩行」ともよぶのであるつまり、「玆の狙公の術を慕う」とは、矛盾と対立を同時に存在させ、<sup>ぜ</sup>「絶対的一」の世界に安住する狙公のテクニックあるいは境地、を自分もまたあこがれる、ということになろうか。ところでしかし、秋瑾に即していえば、それはけっきょく、あこがれでしかなく、むしろ身に親しく共感できるのは、かの「漆室の女」のなげきである。「漆室の女」とは、国を憂え、慨然として自殺した古代の節婦。「列女伝」(「仁智」)に見え、「蒙求」にも「漆室憂葵」とあるが、いま、「後漢書」「盧植伝」に引く「琴操」によれば、その故事は以下の如くである。昔、春秋魯の漆室(地名)に、柱によりかかって悲しげに歌を吟ずる女があった。隣人が、その悲哀の意味をまったくとりちがえて、「へっへ、嫁さんに行きたくなったかの。無理もない」と下卑た様子で彼女に近づいて来たとき、彼女は毅然として答えた。「ああ、何という心得ちがい。そなたは人を知らぬにも程がある。昔、楚の人がその君に罪を得て、うちの東どな

りへ逃げこんできたことがありましたが、馬が逃げだし、わが家の野菜畑をめちゃめちゃに踏みつけにしまい、おかげで、その年は、わたしたち野菜なしの年を送りました。また、わが西隣の人が飼っている羊を見えなくして、わたしの兄に追跡させたことがありました。折しもあたりに霧がたちこめて、濁流があふれ、可愛そうな兄は溺死してしまい、おかげで、わたしは生涯、兄のない身となりました。それもこれも、政治の貧困が原因。わたしは、国を憂え民を傷んで心悲しみ、悲哀を歌に托していたのです。男が欲しいなどとは、とんでもない見当ちがい」そういうと、みずから、懐いむすぼれて人にあらぬ疑いをかけられたのを傷み、もすそをからげて山林に入り、その名もゆかしい女貞（ねずみもち）の木を見つけると、喟然として嘆息し、琴を援って「女貞の辞」を弦にのせて歌い、やがて自らくびれはてたのであった。秋瑾が、みずからを漆室の女に擬するとき、2年前の光緒29年に、二子までもうけながら離別した王廷鈞なる男性の影、いいかえれば、彼との離婚のあと、彼女の周囲の男どもの一部がいかように彼女をみていたかという影、がいかように作用しているかは、微妙であろう。革命とエロス、この古くて新しい命題。秋瑾が「漆室の女」のなげきを、典故として選んだことは、興味深いことといわねばなるまい。(武田泰淳が、「しつっこいまでに刀剣にこだわった」秋瑾に、「何かしらフロイト的な精神病理上のこだわり」を感じとっているのは、おそらく的はずれな妄想ではなく、また革命家の名誉をきずつけることでもない)。なお、「漆室の女」の故事、八国連合軍の入侵に際して作ったとされる「杞人憂」詩にも「漆室空しく懐く憂国の恨」と使われている。さて、秋瑾が拵びとったのは、いうまでもなく、決定的に、政治であり、最後の一聯は、彼女の革命家としての宣言である。

「先民に遺規有り、道在れば復た何をか求めん」われわれの前には、先民、  
いにしえ古の賢人の遺しておかれたのりというものがある。いやしくも、道が蔽として存在する以上、それをおいていったい何を求めるというのだ。「先民」とは、  
いにしえ古の賢人の意。「尚書」の「召誥」にも「王其れ敬徳すみやに疾かに、いにしえ古の先民有夏を相よ」と見えるが、「毛詩」の小雅「小旻しょうびん」に「哀しいかな猶ゆうを為す。先民を是れ程とするに匪あらず」とあり、朱子の「集伝」に「古の聖賢なり」、さ

らに大雅の「板」に「先民言う有り、芻蕘そうじょうに詢はかると」と見える「先民」を、鄭箋は「古の賢者」，「集伝」は「古の賢人なり」と釈する。秋瑾にとって，「先民」とは、大きくいえば、中華民族の祖黄帝，軒轅けんえんであり，近くしていえば，革命の諸前輩を意味するであろう。「遺規」は，後人にのこした戒め。晋の張華の「何劭かしように答う二首」其の二（「文選」巻24）に「周任しゆうじんに遺規こと有り，其の言は明らかに且つ清し」。周任とは，「論語」に見える古の賢人。

おわりに，この両三年来，中国から輸入された新刊書のうち，秋瑾の旧詩の注解をふくむものを書きとめておく。

「辛亥革命時期的詩歌」華南師院中文系『辛亥革命時期的詩歌』編写組編・中華書局出版・1978年11月第1版北京第1次印刷（第3章「起義烈士們的戰歌」第1節は「秋瑾」）

「近代詩一百首」（「中国古典文学作品選読」之一）鍾鼎選注・上海古籍出版社出版・1980年6月第1版第1次印刷（秋瑾の旧詩七首を収む）

「辛亥革命詩詞選」劉運祺・蔡忻生編注・長江文芸出版社出版・1980年第1版第1次印刷（秋瑾の旧詩七首を収む）

（よこやま ひろし）

[附記] 本稿提出後，筆者は機会を得て南京大学中文系で研修する身となった。本年11月，復旦大学の顧易生教授を通じて，上海文学研究所の徐培均先生から先生の筆になる「關於秋瑾的一首佚詩」を登載する《學術月刊》1981年8月号と衛震華氏との合作による八場の越劇《鑒湖碧血》を収める《新劇作》1981年第5期の惠贈をうけた。前者は，去年，樽本主編が訪中された際に顧易生先生に贈った本誌第4号にもとづいて徐先生が中国の読者に本首を紹介したものである。中国側の反応の速さに一驚した次第だが，さらに驚いたことに浙江考察旅行の途次，本日，紹興の秋瑾故居を訪れると，陳列室の壁上に四ツ切り大の本首の復印照片が展示されており，「这是秋瑾在日本所写的五言詩」との説明が附けてあった。写真の下部に363という数字が見えるから，本誌第4号からの復印であることに間違いない。

（1981年12月18日紹興の旅舎にて筆者しるす）